

令和2年
10月30日

病害虫発生予報 11月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

収穫終了後は被害葉等の残渣を圃場から持ち出し、
次作の病害虫の発生源を減らしましょう。

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

促成ピーマン：斑点病，ハダニ類	1
冬レタス：菌核病	2
秋冬ネギ：ネギアザミウマ	2
秋冬ネギ：ネギハモグリバエ	3

【その他の病害虫】

イチゴ，促成ピーマン，促成キュウリ，秋冬ハクサイ，冬レタス，秋冬ネギ	5
------------------------------------	---

【防除所レポート】

ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策	6
ナシ黒星病（秋型病斑）の発生が多くなっています。秋季防除・落葉処理を徹底しましょう！	7
本年のブドウ主要病害の発生経過と今後の防除対策	8

II. 今月の気象予報

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>

フェロモントラップデータ随時更新中

<HP QRコード>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

促成ピーマン

1. 斑点病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、発病度*（本年値 0.5，平年値 0.07），発生地点率（本年値 25%，平年値 7%）ともに平年よりやや高い。

※発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値，最小値は 0 で最大値は 100 となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件で発生しやすいため，整枝，換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 発生が多くなると防除が困難になるため，初期防除を徹底する。
- ③ 罹病部はできるだけ取り除き，ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ④ 薬剤散布は，薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また，薬剤耐性菌の出現を防ぐため，FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 天敵を導入している場合は，影響の小さい薬剤を選択する。

2. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在，寄生葉率（本年値 3.8%，平年値 0.3%），発生地点率（本年値 50%，平年値 15%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので，発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は，薬液が葉裏にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また，薬剤抵抗性の発達を抑えるため，IRAC コードの異なる薬剤を用いてローテーション散布する。
- ③ 天敵を導入している場合は，影響が小さい薬剤を選択する。

冬レタス

1. 菌核病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県西地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、発病株率(本年値4.6%, 平年値3.2%)は平年並～やや高く、発生地点率(本年値69%, 平年値45%)は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生を認めた場合は、菌核が形成される前に発病株を圃場外に持ち出し適切に処分する。
- ② 多発すると防除が困難となるため初期防除を徹底する。
- ③ 薬剤散布は、収穫前日数、使用回数等に十分注意し、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、周辺作物等へ飛散(ドリフト)しないよう注意して散布する。

秋冬ネギ

1. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、被害度※(本年値39.1, 平年値27.3)、芯葉の被害株率(本年値95.1%, 平年値61.2%)はともに平年よりやや高い～高い。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 雑草にも寄生するため、圃場周辺の除草を徹底する。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

(秋冬ネギ続き)

2. ネギハモグリバエ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、被害度※（本年値 14.1，平年値 5.6）は平年より高く、発生地点率（本年値 89%，平年値 76%）は平年よりやや高い。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値，最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 薬剤散布は，必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また，収穫前日数に十分注意する。
- ② 薬剤抵抗性の発達を抑えるため，IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 県内でネギハモグリバエの別系統が確認されている。本系統の薬剤感受性は不明であるため，防除実施後は効果を確認する。

トビイロウンカによる水稻の坪枯れを確認しました

【本年の発生】

本年、10月中旬ごろ県南地域の加工用米作付け圃場で、トビイロウンカ(写真1)による坪枯れ(写真2)の発生を確認しました。

例年は主に西日本で問題になりますが、本年は関東地方まで発生が認められる等、国内の幅広い地域で発生が確認されました。

【被害の特徴】

大量のトビイロウンカがイネの茎を吸汁加害することにより、数十株から数百株がまとまった円形状に枯死、倒伏します。被害が激しいときは、圃場全体が枯死、倒伏することもあります。

【発生生態】

本虫はイネ属のみをエサとするため、国内では越冬できず、日本での発生は他地域からの飛来に由来します。例年、常発地であるベトナムから中国を経由し、6~7月の梅雨時期に吹く強い南西風に乗って、九州地方を中心とした西日本に飛来します。飛来してくる本虫の数は比較的少ないのですが、増殖率が高いため世代を重ねる度に増加します。多発すると、秋にイネを吸汁して枯死させる坪枯れの被害をもたらすことから通称「秋ウンカ」と呼ばれます。

【次作に向けて】

近年、西日本で被害の増加が問題となっています。本県でもかつては被害が発生していたことから、今後も気象条件等によっては発生する可能性があるため、圃場の観察に努めましょう。特に、晩生品種作付け圃場では、飛来してからの増殖期間が長くなるため、被害が発生しやすくなる可能性があります。

また、本虫は株元に生息するため、圃場を観察する際は、株元を注意深く観察し、本虫を確認した場合には防除の実施を検討して下さい。なお、粉剤または液剤の散布にあたっては、株元まで十分に届くよう散布しましょう。



写真1 トビイロウンカ



写真2 坪枯れ症状

【その他の病害虫】

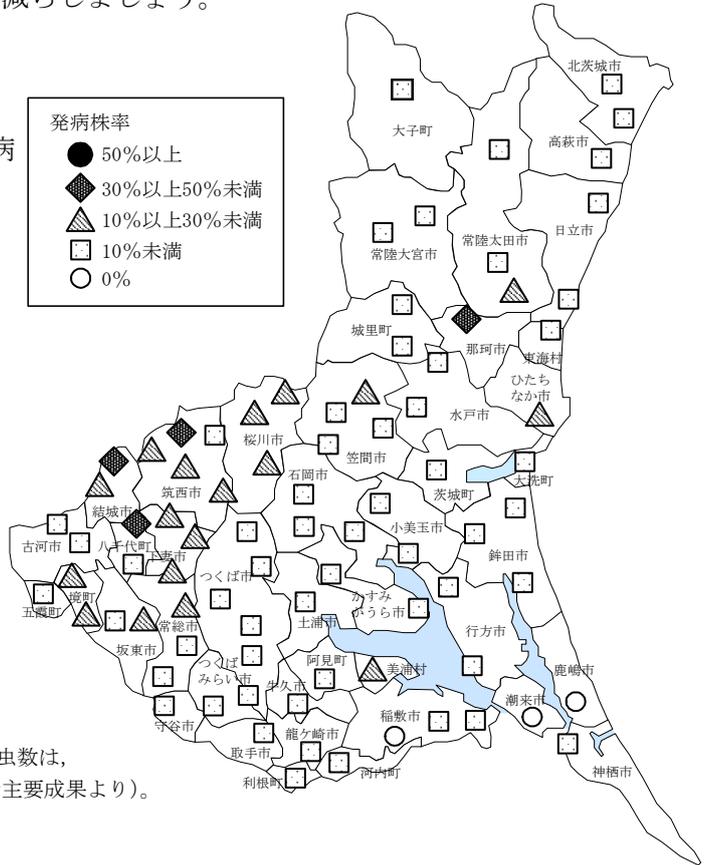
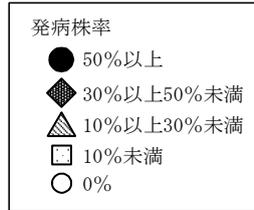
作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少ない	10月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	ハダニ類	発生量：やや少ない	10月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
促成ピーマン	うどんこ病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	アザミウマ類		
促成キュウリ	退緑黄化病	発生量：－	10月上旬現在，抑制キュウリで平年並の発生である。媒介虫であるタバココナジラミの防除対策等を徹底する。
秋冬ハクサイ	軟腐病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	べと病	発生量：平年並 ～やや少ない	10月下旬現在，平年並～やや少ない発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
冬スレ	斑点細菌病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
秋冬ネギ	軟腐病	発生量：多い	10月下旬現在，平年より多い発生である。

ひこばえ（再生稻）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策

県内 83 地点の水田において、ひこばえ（再生稻）におけるイネ縞葉枯病の発生状況を調査したところ、県内全地域で発生を確認しました。翌年の縞葉枯病の発生を少なくするためには、引き続き徹底した防除対策が必要であり、速やかにひこばえをすき込むとともに、冬季の畦畔等の除草に努め、ウイルスを保毒したヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう。

[現在の発生状況]

- 令和 2 年 9～10 月に調査した結果、全地域でひこばえにおけるイネ縞葉枯病の発生を確認した（図、表）。
- 県西地域の平均発病株率は 9.6%と県内で最も高かった（表）。
- 市町村別の最高発病株率は、0～41.7%であった（図、表）。



[防除対策]

- ひこばえは、ヒメトビウンカの増殖・越冬場所となる他、ひこばえが発病株である場合、ヒメトビウンカの保毒虫率上昇の原因となるため、収穫後は速やかに耕起する※。
 - 畦畔、土手等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となるため、除草に努める。
- ※ 畦畔のイネ科雑草におけるヒメトビウンカの越冬虫数は、水田の耕起時期が早いほど少ない（R1 農業研究所主要成果より）。

図 ひこばえ（再生稻）におけるイネ縞葉枯病の発病株率（各地点の最高値）

注 1) 調査した 5 圃場/地点のうち、最も高かった圃場のデータ 注 2) 1 圃場あたり 300 株の見取り調査

表 ひこばえ（再生稻）におけるイネ縞葉枯病の各市町村別の平均発病株率および最高発病株率

地域	市町村	発病株率 (%)		地域	市町村	発病株率 (%)		地域	市町村	発病株率 (%)	
		平均 ¹⁾	最高 ²⁾			平均	最高			平均	最高
県北	日立市	2.4	4.7	鹿行	鹿嶋市	0	0	県南	守谷市	3.7	7.0
	常陸太田市	4.1	12.3		神栖市	0.1	0.3		つくばみらい市	1.2	2.7
	高萩市	1.5	5.3		銚田市	0.9	3.3		利根町	0.1	0.3
	北茨城市	1.1	3.0		潮来市	0	0		県南平均	1.8	-
	常陸大宮市	1.6	3.3		行方市	1.0	2.7		下妻市	11.0	26.7
	大子町	2.7	3.3		鹿行平均	0.6	-		筑西市	11.8	30.7
	県北平均	2.4	-						桜川市	8.7	16.0
県央	水戸市	2.7	4.0	県南	土浦市	5.0	7.3	県西	結城市	18.9	37.0
	ひたちなか市	4.9	10.0		石岡市	1.9	6.3		常総市	6.8	24.3
	那珂市	13.5	39.7		かすみがうら市	3.1	9.7		八千代町	10.6	41.7
	小美玉市	1.3	3.3		龍ヶ崎市	0.1	0.3		古河市	3.1	6.0
	茨城町	3.9	5.0		牛久市	0.1	0.3		古河市	3.1	6.0
	大洗町	1.2	2.3		稲敷市	0.2	1.3		坂東市	3.2	10.0
	東海村	3.0	5.7		美浦村	5.0	10.3		五霞町	7.0	9.0
	笠間市	2.4	10.7		阿見町	3.3	5.7		境町	12.2	22.7
	城里町	1.6	6.3		河内町	0.1	0.3		県西平均	9.6	-
	県央平均	3.1	-		取手市	0.2	0.7		全県平均	4.4	-
			つくば市	2.1	8.7						

1) 各市町村1～6地点の平均値。1地点あたり5圃場調査（300株/圃場）
2) 市町村内で最も高かった圃場のデータ

ナシ黒星病（秋型病斑）の発生が多くなっています。

秋季防除・落葉処理を徹底しましょう！

1. 本年の発生状況

本年は生育期間中、葉や果実に発生が多くみられ、落葉前の10月中下旬に黒星病の秋型病斑（写真）の調査を行った結果、発病度は県内全域で平年より高く、発生地点率は一部の地域を除いて平年より高かった（表）。



写真 ナシ黒星病の秋型病斑（葉裏の薄い黒色の病斑）

表 ナシ黒星病秋型病斑の発病度と発生地点率

地域 (地点数)	発病度 ¹⁾			発生地点率(%)		
	R2	平年 ²⁾	順位 ³⁾	R2	平年 ²⁾	順位 ³⁾
県北・県央(4)	7.3	0.5	1	100	62	1
県南(5)	5.2	1.2	1	60	60	6
県西(10)	1.9	0.8	3	90	63	3
全県(19)	4.8	0.8	1	83	62	2-3

1) 発病度：圃場当たり300葉について発病の程度をもとに算出した値。

最小値は0で最大値は100となる。

2) 平年値：平成22～令和元年の平均値

3) 順位：本年を含む過去11年間における本年値の順位（2-3は2位から3位まで同じ数値であることを示す）

2. 防除対策

①落葉前の薬剤防除

黒星病の秋型病斑上に形成された分生子は、10～11月の降雨により、枝を流れ落ちて鱗片に感染し、翌年の伝染源となる。そのため、収穫終了後から落葉前までの秋季防除を徹底する。特に、徒長枝の先端に薬液が十分かかるよう、スピードスプレーヤーの散布圧を調整する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

また、農薬の使用回数は本年の収穫終了後から翌年の収穫終了までをカウントするため、注意する。

②落葉処理

秋型病斑を生じた落葉上に形成された子のう胞子は、翌年の3～5月にかけて好適な温度・湿度条件になると降雨の度に飛散する。そのため、落葉は集めて土中深く埋める等、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。この作業ができない場合、落葉をロータリで土中にすき込むことでも効果が期待できる。

本年のブドウ主要病害の発生経過と今後の防除対策

本年のブドウにおける主な病害の発生状況をまとめました。休眠期は薬剤による防除のほか、落葉処理や巻きひげの除去等、病害虫の発生しにくい圃場の整備に努めましょう。

1. 晩腐病

例年8月頃から発生が見られ、収穫期にかけて増加する。本年は8月から発生し、発病果房率は平年並であった(表)。

症状 果実表面に鮭肉色の孢子粘塊を生じ(写真)、果皮にしわがよってミイラ化する。

感染経路 病原菌は結果母枝等に潜在的に感染しており、5~7月頃に降雨により果実に伝搬され、その後の酸度低下・糖度の高まりとともに発病する。

防除対策 ◇病原菌の越冬場所となる結果母枝、巻きひげ、果梗の切り残し等を剪定時に取り除き、適切に処分する。

◇本年多発した圃場では、次年度も多発する可能性があるため、発芽前の休眠期防除および開花直前から大豆粒大期までの予防散布に重点を置く。

◇傘かけや袋かけを行う。例年発生が問題となる圃場では雨よけ施設の導入を検討する。

2. ベと病

例年、6月頃から発生する。本年は7月から発生を確認し、発病葉率は平年並であった(表)。

症状 若葉では緑色が薄れた病斑、成葉では葉脈に囲まれた角型の黄色病斑を形成し、葉裏には毛足の長い白いかびが密生する。果穂に発病すると果実の肥大が停止する。

感染経路 病原菌は被害葉の組織内で越冬し、5月の展葉期ごろから雨水や風で葉に到達する。発病後は葉裏の白いかびから2次伝染を繰り返す。

防除対策 落葉は翌年の伝染源となるため、集めて土中深く埋める等、適切に処分する。

3. 褐斑病

例年、7月頃より発生する。本年は6月から発生を確認したが、発病葉率は平年並~やや低かった(表)。

症状 葉に黒褐色の病斑を生じ、表裏に黒ずんだかびが見られる。発病が激しいと早期に黄化落葉し、果房の着色不良や糖度低下を招く。

感染経路 病原菌は、結果母枝や枝の粗皮、落葉に付着して越冬する。これらが開花期ごろから風雨によって飛散し、伝染源となる。

防除対策 翌年の伝染源となるため、落葉は集めて土中深く埋めるとともに、結果母枝等は剪定時に取り除き、適切に処分する。



写真 晩腐病による被害果実

表 晩腐病、ベと病および褐斑病の発生推移

		(%)				
病害名	調査項目	6月	7月	8月	9月	
晩腐病	発病果房率	本年	0	0	6.2	—
		平年	0	0.1	4.3	—
べと病	発病葉率	本年	0	1.6	2.6	5.3
		平年	0.3	2.5	3.7	7.0
褐斑病	発病葉率	本年	0.1	0	2.7	4.3
		平年	0	1.3	2.5	13.1

平年値：平成22年~令和元年の平均値

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 10月31日から11月30日)

気象庁(10月29日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	20	40	40
	降水量	関東甲信全域	40	40	20
	日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 10月31日(土曜日)から11月6日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

<2週目の予報> 11月7日(土曜日)から11月13日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<3週目から4週目の予報> 11月14日(土曜日)から11月27日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(令和2年4月24日発表)の防除所レポート参照